

大学生の親に対する情報管理方略：社会的認知的領域による検討

Strategies for managing information to parents among university students.: Analyses based on social-cognitive domain theory

高橋 彩*

要約 社会的認知的領域理論に基づき、大学生が日常の活動について親に対して使用する情報管理方略を検討した。研究1では大学生178名を対象に、日常の様々な活動をどの程度個人の自由と判断するかをもとに、社会的認知的領域に分類した。因子分析の結果、仲間多面領域、道徳・慣習領域、自己管理領域、個人領域に相当する4因子が得られた。研究2では、大学生231名を対象に、母親に対する情報管理方略の領域による違いを明らかにし、情報管理方略と抑うつ、アイデンティティ、親への信頼との関連を検討した。その結果、全ての領域で親が“聞いてきたら答える”が最も多く、“作り話や嘘をつく”が少なかった。“全てありのまま話す”選択率は、親への信頼と正の相関があった。男子では、個人領域で“作り話や嘘をつく”ことは、抑うつと正の、アイデンティティと負の相関があった。女子では、自己管理領域で“その話題に触れるのを避ける”ことは、アイデンティティや親への信頼と負の相関があった。

キーワード 青年, 社会的認知的領域理論, 開示, 秘密, 嘘

自律性の獲得は青年期の重要な課題の一つである (Steinberg, 1999)。青年の家族外で過ごす時間の増加や、意思決定できる事の増加に伴い、親が青年の行動を把握することは難しくなる。Stattin & Kerr (2000) は、親が子どもの行動を監視すること、追跡することを意味するモニタリングと青年の適応(非行や学校での問題や抑うつ)の少なさ、良い学業成績など)との関連を示した研究をレビューし、その解釈に疑問を呈した。従来の研究は親のモニタリングを、親が自分の子どもの行動や所在に関する知識の量で測定しているが、その情報を得るために親が何をしたかを十分に測定していないと批判し、親の知識は、親の追跡や監視よりも、子どもの開示より得られていることを明らかにした (Kerr & Stattin 2000; Kerr, Stattin, & Trost 1999; Stattin & Kerr, 2000)。これを機に、青年期の親子関係における青年の自発的開示に注目

し、青年の適応との関連の再解釈を試みる研究が出てきた (例えば Crouter, Bumpus, Davis, & McHale, 2005; Darling, Cumsille, Caldwell, & Dowdy, 2006)。さらに開示の程度だけでなく、青年が自分の普段の活動や所在について親にどう伝えるのか、すなわち青年が親に対して使用する情報管理方略としての開示や嘘に関連した要因も検討されてきた。例えば、家族環境における高い統制 (Jensen, Arnett, Feldman, & Cauffman, 2004) や、青年の問題行動 (Marshall, Tilton-Weaver, & Bosdet, 2005)、青年の攻撃性 (Engels, Finkenauer, van Kooten, 2006) は嘘の多さと関連していた。また青年が親に秘密にすることは、初期青年期の抑うつ、初期から中期青年期の非行を予測すること (Frijns, Keijsers, Branje, Meeus, 2010) が示唆されている。逆に、親への信頼は、嘘の少なさ、より大きな開示 (Smetana, Metzger, Gettman, &

* 愛知学院大学政策科学研究所研究員

Campione-Barr,2006) と関連し, 親を権威のある養育と評定する青年は嘘をつくことが少なかった (Darling et al., 2006).

情報管理方略には, 親に“全て話す”“嘘をつく”以外にも“話す事を避ける”“親が知りたがる重要な部分を省いて話す”“親が尋ねたときだけ話す”などが検討されている. 特に青年が自律性を獲得したいと望むにつれて, それを実現するために, 親に話さない場合もあるだろう. 情報管理方略に関する先行研究は, 友人関係, 自由時間の過ごし方, お金の使い道, 夜遅い外出など扱う事柄に共通点があるものの, 大きく二つの流れがある. 一つは, 親が知りたがる一般的な青年の活動として扱う研究であり, 青年が開示する, あるいは秘密にすることによる親の知識量の変化と, それが青年の非行や心理的適応に及ぼす影響, 青年の開示や秘密に結びつく家族関係の特徴を明らかにすることに主眼を置いている (例えば Darling et al., 2006; Jensen et al., 2004; Kerr & Stattin, 2000 ; Marshall et al., 2005). もう一方は, 青年の活動を社会的認知的領域理論に基づいて分類する研究 (例 えば Cumsille ,Darling, Flaherty, & Martinez, 2006; Smetana et al., 2006; Yau, Tasopoulos-Chan, & Smetana, 2009) である. これらの研究では, 青年が自分の様々な活動について, 親が規則を作り統制することを認めるのか, それとも親の権威を拒絶し個人の権限の範囲とみなすのか, によって使用する情報管理方略が異なると考える.

社会的認知的領域理論 (Smetana, 2006; 首藤, 1992; Turiel, 2006) では, 判断や推論, 意思決定に用いる“道徳”“慣習”“個人”という質的に異なる三つの思考様式を区別する. 道徳領域は, 他者の福祉, 権利に関連する行為が含まれ, 規則とは無関係に善い悪いと判断される. 慣習領域は, 社会集団に参加している個人間の関係を調整する, 共有された規範, エチケツトやマナーの様な行為が含まれる. 慣習領域の行為は, 特定の規則や権威の命令による恣意的で, 文脈に相対的なものであると仮定される. 個人領域の行為は, 行為

者だけに影響があり自分の統制下にあると見なされ, 個人に決定権があると仮定される. 個人領域は, 自分自身の身体の管理, プライバシー, 友人の選択, 趣味といった行為を含む. また近年では, 自己の安全や健康に関する問題として言及される自己管理領域や, 複数の領域から判断されることの多い多面領域の思考も区別する (Smetana,2000; Smetana, Campione-Barr, & Daddis,2004; Smetana et al.,2006). 各領域に含まれる事柄はあらかじめ決定されたものではない (首藤・二宮, 2003). ある行為が, 規則の有無や権威者の命令とは無関係に善悪が判断される場合は, 道徳領域の (思考から判断された) 行為とみなす. 行為の影響が自分だけにあり, 自分の統制下におかれ, 個人の自由意志に基づくものと判断されるならば, それは個人領域の (思考から判断された) 行為と呼ばれる. “青年がデートをし始める時期”について親は慣習領域や自己管理領域から判断するのに対し, 青年は個人領域の問題と判断する (Smetana,1989) など, 親に比べて青年は自分の活動の多くの範囲を個人領域とみなす (Smetana & Gaines,1999). また青年が, 親には統制する権限がないと感じる活動の範囲は, 年齢とともに拡大し (Smetana, 2002), 特に初期青年期には, 急激に個人領域の事柄に対して, 親の権威の正当性や親の規則に従う義務を認めなくなる (Darling Cumsille, & Martinez, 2008). 以上のように, 社会的認知的領域理論によれば, 青年期の自律性は, 個人領域の拡大と捉えられ, 情報管理方略は自律性の獲得の手段の一つとみなすことが出来る. 青年が様々な活動や自分に関する情報を個人領域から判断した場合に, 青年が親に対してどの情報開示方略を選択するか, またそれは他の領域から判断した活動に関して取る方略と異なるのか, さらに方略と心理社会的適応や親子関係との関連を検討することで, いつ, どの活動について, どの方略をとることが問題であるのか (Smetana, 2008), という疑問を明らかに出来る.

社会的認知的領域理論の観点から, 青年の情報

管理方略、親のモニタリングや権威概念、青年の適応、親子関係などを検討した研究は、Smetanaらを中心に、ヨーロッパ系、メキシコ系、中国系、アフリカ系アメリカ人青年、チリ人青年といった様々な民族背景の青年を対象に行われてきた（二宮・高橋，2010；高橋・二宮，2010）。異なる民族、文化、社会経済的文脈での情報管理方略研究に関心が高まっている（Smetana, 2008）けれども、日本人青年を対象とした社会的認知的領域理論研究（Hasebe, Nucci, & Nucci, 2004；首藤・二宮，2000）は非常に限られており、青年の情報管理方略を検討した研究は見当たらず、知見を比較するに至っていない。よって、本研究は日本人青年を対象に、社会的認知的領域理論に基づき、情報管理方略と青年の適応（抑うつ、アイデンティティ）および親子関係の質（親への信頼感）との関連を検討する。

しかしながら、社会的認知的領域理論の先行研究を日本人青年に適用するには、いくつかの問題点がある。一つ目は、様々な青年の活動と、道徳、慣習、個人、多面、自己管理といった領域との対応についての方法論上の問題である。特に個人、多面、自己管理といった領域は、親子間葛藤において青年や親が用いる正当化（Smetana & Gaines, 1999）や、親が青年期の子どもに制限を設定するか、子どもの意思決定にまかせるかを判断する際に用いる正当化（Smetana & Chuang, 2001）から確立されてきた。本来はこのように、どの領域から判断されたかによって、青年の活動の領域が決定されるはずであるが、最近では“自由時間の使い方”は個人領域の項目、“飲酒”は自己管理領域の項目といったように、先行研究で信頼性が得られていることを理由に項目の領域が先に決定され、そのまま使用される研究が多い（Cumsille et al., 2006, 2009；Darling Cumsille, & Martinez, 2007；Darling et al., 2008；Perkins & Turiel, 2007；Smetana et al., 2004, 2006；首藤・二宮，2000）。日本の青年に適用する際には、先行研究で信頼性が得られているという理由だけで利用する事は問題がある

だろう。

第二に、道徳、慣習、個人領域を区別する規則随伴性の問題である。規則随伴性とは、規則があれば悪いという慣習領域の判断基準である。それに対し、個人領域は、規則とは無関係に自由裁量がある、その人個人の問題であると判断する（首藤・二宮，2003）。先行研究で、個人領域を代表する項目として“どんな服装や髪型をするか”が使用されている（Darling et al., 2008；Hasebe et al., 2004；Smetana, 2000）。しかしアメリカに比べ、一般的に制服や髪型に関する校則がある日本の中学生や高校生にとっては、規則随伴性に基づき個人領域とはみなされない可能性がある。同じく、自己管理領域の代表項目として“飲酒”と“喫煙”が使用されているが、この行為も年齢制限（例えば、成人なのだから個人の嗜みである等）や校則など規則随伴性が判断に影響を与えると考えられる。そこで本研究では規則随伴性の影響を少なくするため、大学生が親に対して使用する情報管理方略を調査する。

調査1では、日常の様々な活動について大学生は、どの社会的認知的領域と捉えているのかを明らかにする。大学生の年齢は、emerging adulthood（Arnett, 2000）にあたり、親の統制や監視が高校生よりも減少する時期である（Jensen et al., 2004）。“親が以下の事柄について規則を作っても良いか”という、親の権威の正当性によって、領域を分類する方法もあるが（Darling, Cumsille, & Pena-Alampay., 2005）、親の権威の正当性を拒絶することは、個人領域の拡大とみなされることから、出来る限り社会的認知的領域理論の個人領域の定義に基づき、大学生が判断する“個人の自由”から領域を確認する。日本の認知的社会的領域研究において、個人領域を規定する自己決定権の概念の発達が十分に検討されていないという指摘（首藤・二宮，2003）もあり、大学生の個人の自由の判断を取り上げることは意味があるだろう。

調査2では、調査1で確認した社会的認知的領域ごとに、大学生が使用する情報管理方略を明ら

かにし、情報管理方略と青年の抑うつ、アイデンティティ、および親への信頼感との関連を検討する。先行研究から、情報管理方略のうち、嘘と関連する抑うつ (Frijns et al.,2010; Tasopoulos-Chan, Smetana, & Yau, 2009) と、十分な開示と関連する親への信頼感 (Smetana et al.,2006; Yau et al.,2009) を取り上げた。また、先行研究で使用された自尊心の代わりに、青年期後期の適応の指標として、アイデンティティを取り上げた。アイデンティティ形成は、自分と自分を取り巻く文脈との間で絶えず相互調節されるプロセスであり (Bosma & Kunnen,2001)、重要な他者である親からの期待や欲求と、青年自身の願望や考えの相互調整のプロセスと捉えられている。そのため、親に対する情報管理方略のあり方は、青年のアイデンティティの感覚に反映されると考えた。

調査 1

日常の様々な活動について、大学生はどの社会的認知的領域から概念化しているのかを調べることを目的とした。先行研究では、各領域を代表する項目に対し、親の権威の正当性 (Darling et al.,2005) や、親の統制 (Hasabe et al.,2004) の評定値を用いた因子分析で、領域を確認するという手続きが取られている。この手続きに従い、“個人の自由”の評定値により領域を確認する。調査2で情報管理方略を調査する前に、個人の自由の判断それ自体に青年の適応 (アイデンティティ、抑うつ) との関連があるかも確認する。

方法

調査協力者 飲酒や喫煙を、先行研究と同様に自己の安全や健康に関する問題である自己管理領域と定義するために、未成年の1, 2年生が多く履修する大学の授業で、2011年4月に質問紙調査を行った。分析対象は男子114名、女子64名、計178名 (平均年齢18.67歳, SD=.98)、年齢の内訳は、20歳未満152名、20歳13名、21歳から23歳13名であった。

質問紙

青年の活動 社会的認知的領域に関する先行研究から、各領域を代表すると思われる40項目を選び使用した。Table1に使用した項目と先行研究における領域を示した。“あなたは次の事柄についてどの程度個人の問題であると思いますか”と教示し、“いつでも個人の自由であると思う (5点)” “たいてい個人の自由であると思う (4点)” “どちらとも言えない (3点)” “あまり個人の自由ではないと思う (2点)” “全く個人の自由ではないと思う (1点)” の5件法で評定を求めた。

抑うつ 日本語版 CES-D Scale (島・鹿野・北村・浅井, 1985) の20項目を用いた。回答方法は“この1週間にまったくない (0点)”, 週のうち“1-2日あった (1点)” “3-4日あった (2点)” “5日以上あった (3点)” であった ($\alpha = .86$)。

アイデンティティ Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版 (三好・大野・内野・若原・大野, 2003) の第V段階“アイデンティティ達成対アイデンティティ拡散”の下位尺度7項目を用いた。回答方法は“あてはまる (4点)” から“あてはまらない (1点)” の4件法であった ($\alpha = .73$)。

結果と考察

青年の活動の因子分析結果 青年の活動40項目に対する“個人の自由”評定得点を用いて主因子法 promax 回転による因子分析を行った。回転後の因子負荷量や解釈可能性から最終的に4因子を採択し、因子負荷量が.30以下で複数の因子に負荷をもつ4項目を除いた36項目の因子分析結果をTable 1に示した。第1因子は、先行研究で多面、自己管理、仲間多面、個人領域として使用された項目が含まれており、交友関係を表す内容から、“仲間多面領域”と解釈した。第2因子は11項目中5項目が、先行研究の道徳・慣習領域の項目であり、その他にもドラッグやタトゥー、友達の悪い行い等がまとまった。項目の平均値を見ると他の因子よりも低く、個人の自由とは考えていない

Table 1 青年の活動に対する「個人の自由」判断についての因子分析結果 (主因子法プロマックス回転)									
						n=178			
		F1	F2	F3	F4	M	SD		
仲間多面領域 (α=.89)									
多	SV, SM	誰とデートをするか	.84	-.09	.14	-.14	4.51	.72	
個	SM	どんな子を恋人にするか	.80	-.03	-.10	-.12	4.59	.70	
個	Y, SV, SM	友達と何を話すか	.79	-.03	-.18	-.05	4.63	.69	
多	Y, SV	恋人がいること	.73	-.06	-.06	.09	4.71	.55	
自	Y, T	性行為をすること	.70	.115	-.22	-.24	3.92	1.23	
多	Y, T, SV	どんな内容のメールをするか	.70	-.19	-.23	.07	4.63	.65	
		誰とメールするか	.62	-.03	.09	.08	4.60	.65	
個	Y	どの友達と一緒に過ごすか	.58	-.14	.06	.34	4.64	.57	
		どんな子と友達になるか	.42	-.10	.21	.21	4.57	.66	
道徳・慣習領域 (α=.83)									
道	S, H	親にうそをつくこと	-.17	.80	-.08	.03	2.85	1.18	
道	SM, S, H	親との約束を守らない	-.05	.72	.06	-.07	2.31	1.12	
道	SM	悪い乱暴な言葉づかいをする	.10	.71	-.06	.02	2.86	1.25	
道	SM	先生に口答えをする	-.05	.60	.06	.10	2.94	1.21	
自	Y, T, SM	ドラッグを使用すること	-.04	.56	.10	-.02	1.58	1.19	
仲	S	友達が悪い事をしたのを人に話すかどうか	.10	.47	-.22	.09	3.14	1.20	
多	SM	親が家にいない時に、友達とたぶろろする	.19	.44	.01	.09	3.48	1.19	
		ブログあるいは掲示板に何を書くか	.27	.41	.05	-.12	3.41	1.34	
道	S, H	親のお金をだまっけてかりること	-.11	.39	.06	-.14	1.29	.66	
多	SV, SM	どんなウェブサイトにアクセスするか	.07	.35	.12	-.02	3.98	1.05	
多	Y, T	タトゥーを入れること	.05	.34	.15	.09	3.28	1.31	
自己管理領域 (α=.84)									
自	Y, T	学校をさぼること	-.19	.04	.76	.01	3.04	1.39	
自	T, SV, SM	お酒を飲むこと	.08	-.16	.70	-.06	3.85	1.12	
自	Y, T, SV, SM	タバコを吸うこと	.03	.13	.62	-.03	3.33	1.44	
自	SM	テストで悪い点を取る	-.26	.13	.61	.07	3.37	1.22	
多	Y, T, SV, SM	性描写のある映画や漫画を観ること	.20	-.07	.59	-.06	4.25	.86	
多	Y, T, SV	夜遅くまで外出すること	.17	.13	.50	.01	3.66	1.16	
個	Y, T, SV, SM	自分の自由な時間をどう過ごすか	-.10	-.10	.43	.30	4.62	.55	
		ゲームやパソコンを長時間する	.09	.16	.42	.07	3.97	1.15	
多/自	Y, T/SM	宿題や課題を提出するかどうか	-.05	.23	.36	.08	3.27	1.41	
		インスタント食品やお菓子ばかり食べる	-.02	.27	.34	.01	3.86	1.15	
個人領域 (α=.74)									
個	SV, SM	誰を好きになったり、夢中になったりするか	.11	-.04	-.06	.83	4.75	.50	
個	SV, SM	好きな人や夢中になっている人がいること	.03	-.05	.01	.77	4.71	.55	
		今日学校で起きたことについて人に話すかどうか	-.01	.22	-.01	.46	4.39	.81	
多/仲	Y, T, SM/SV	親が気に入っていない友達とつき合うこと	.15	.09	.05	.36	4.30	.79	
個	Y, T, SV	学校の部活やクラブに参加するかどうか	.13	-.11	.22	.32	4.58	.74	
個	S, H	どんな髪型や服装をするか	.19	.15	.05	.31	4.46	.71	
因子間相関									
		F1	.26	.46	.63				
		F2		.58	.23				
		F3			.36				

注) 項目の前に先行研究で用いられた領域を示した。先行研究は以下の通りである。Y:Yau et al., 2009, T:Tasopoulos-Chan et al., 2009, SV:Smetana et al., 2009, SM:Smetana et al., 2006, S:Smetana, 2000, H:Hasebe et al., 2004

注) 個: 個人領域, 多: 多面領域, 仲: 仲間多面領域, 自: 自己管理領域, 道: 道徳・慣習領域を意味する。

と判断し、領域の概念定義に従って“道徳・慣習領域”と解釈した。第3因子は10項目中5項目が先行研究の自己管理領域の項目で構成され、その他の項目も青年の健康や将来への影響に関連することから、“自己管理領域”と解釈した。第4因子は6項目中4項目が先行研究の個人領域の項目

で構成された。また Table 1に示した項目ごとの“個人の自由”評定得点の平均値を見ると、第4因子の項目は全て4点以上で標準偏差も小さいことから、“個人領域”と解釈した。各因子のα係数は第1因子9項目(α=.89)、第2因子11項目(α=.83)、第3因子10項目(α=.84)、第4因子6項目(α=.74)であった。以上の結果から、36の青年の活動を道徳・慣習、自己管理、仲間多面、個人という社会的認知的領域理論に対応した形で確認出来た。

各因子(領域)を構成する項目群の評定得点を合計し項目数を除したものを、各領域の個人の自由得点とした。個人の自由得点について性差を確認したところ、自己管理領域のみ有意差があり(t(176)=2.65, p<.01)、男子(M=3.83)の方が女子(M=3.53)よりも得点が高かった。

社会的認知的領域別個人の自由得点とアイデンティティならびに抑うつとの関係 アイデンティティ合計得点ならびに抑うつ合計得点と、各領域の個人の自由得点との相関係数を算出した。男女とも“個人の自由”領域得点と抑うつとの有意な相関はなかった。女子はアイデンティティと仲間多面領域(r=-.256)、道徳・慣習領域(r=-.286)、個人領域(r=-.307)の個人の自由領域得点との間にいずれも5%水準で有意な負の相関があった。男子はアイデンティティと個人領域(r=.217)との間に5%水準で有意な正の相関があった。よって弱い相関ではあるが、個人領域の活動について“個人の自由である”と考えるほど、男子はアイデンティティの感覚が高いが、反対に女子は個人領域、仲間多面領域、道徳・慣習領域の活動について“個人の自由である”と考えるほど、アイデンティティの感覚が低いという関連になった。個人領域の活動における意思決定自律性が青年期中期から後期にかけて拡大することは、高い自己価値に関連するという(Smetana et al, 2004)結果は、男子では同様の傾向があると言えるが、女子は個人の自由を、自分勝手な意思決定と捉えたのかもしれない。

調査2

調査1で分類した四つの社会的認知的領域の活動について、大学生が親に対して使用する情報管理方略を調べ、領域による情報管理方略の違いと、情報管理方略と抑うつ、アイデンティティ、親への信頼との関連を検討する。

先行研究によると、個人領域、自己管理領域は親に全て話す方略が多く、嘘をつくことは少ない (Smetana, Villalobos, Tasopoulos-Chan, Gettman, & Campione-Barr, 2009)。また中国系、メキシコ系、ヨーロッパ系アメリカ人の中期青年を対象とした研究では、個人領域では聞いてきたら答える方略が他の方略よりも多かった (Tasopoulos-Chan et al., 2009)。大学生ではさらに自律性の獲得や個人の権限の拡大、親の統制の減少といった特徴があるために、自律性を獲得するために嘘をつく必要性や、親に開示する義務を感じなくなるだろう。実際に、高校生よりも大学生は親に嘘をつく頻度が少ないことが示されている (Jensen et al., 2004)。よって、大学生では個人領域と自己管理領域の活動に対する方略は、“聞いてきたら答える”が他の領域に比べて多く、“作り話や嘘をつく”は少ないと予測した。

個人領域で嘘をつくことと抑うつ気分とは、正の相関があった (Smetana et al., 2009; Tasopoulos-Chan et al., 2009)。青年のアイデンティティは、青年自身の願望や考えと重要な他者である親からの期待や欲求との相互調整の結果と捉える事が出来る。個人の自由と考える活動について親に嘘をつく青年は、親との間に生じた食い違いの調整に失敗し、アイデンティティが拡散した状態にあるかもしれない。以上の事から、個人領域で“作り話や嘘をつく”ことと、抑うつと正の、親への信頼感と負の、アイデンティティと負の相関があると予測した。

先行研究で、青年は仲間について、個人領域よりも秘密にする (Smetana et al., 2006) ことや、話し合いを避ける方略が多かった (Smetana et

al., 2009)。本研究の調査1の仲間多面領域には友人と恋人が含まれるため、先行研究と同様にこの領域の方略は個人領域よりも、“その話題に触れるのを避ける”が多く、“全てありのまま話す”が少ないと予測した。ただし親への信頼感の高さは、より大きな開示と相関があること (Smetana et al., 2009; Tasopoulos-Chan et al., 2009) から、仲間多面領域を“全てありのまま話す”ことと正の相関があると予測した。

道徳・慣習領域の活動に対しては、親の不承認や罰の恐れという理由によって、個人領域よりも“作り話や嘘をつく”ことが多いと予測した。部分的な開示(尋ねられた時だけ話す)と詳細を省く)は、問題行動や親への信頼と有意な関連はないこと (Tasopoulos-Chan et al., 2009) から、全ての領域で、“聞いてきたら答える”と“少し話すが必要なことは話さない”方略は、抑うつや親への信頼感との関連はないと予測した。

方法

2011年4月の授業時間内に実施した。調査協力者の負担を軽減するため、アイデンティティか、親への信頼のいずれかが含まれる2種類の調査用紙を作成し、親に対する情報管理方略は、母親と父親のどちらか1人を調査協力者自身が選んで回答するように求めた。

調査協力者1 情報管理方略、抑うつ、アイデンティティの尺度を含む質問紙に回答した。母親選択は144名、父親選択は46名であり、本研究では母親を選んだ男子105名、女子39名を分析した (平均年齢18.42歳, $SD=.91$)。

調査協力者2 情報管理方略、抑うつ、親への信頼の尺度を含む質問紙に回答した。母親選択は89名、父親選択は17名であり、母親を選んだ男子26名、女子63名を分析した (平均年齢19.48歳, $SD=.76$)。

質問紙

情報管理方略 調査1の青年の活動40項目を、

語尾などの表現を変更して使用した。“あなたは普段次のような事柄について、親にはどのような態度をとりますか。母親か父親のどちらか1人を選んで回答して下さい。”と教示し、次の5方略から一つを選び、選べない場合は“分からない(不明)”と回答するよう求めた。(括弧内は省略した表現として、以下の文中で使用する。)

“その話題に触れるのを避ける(回避)”“聞いてきたら答える(答える)”“作り話や嘘をつく(嘘)”“少し話すが、重要なことは話さない(省略)”“全てありのまま話す(全て話す)”

抑うつ 日本語版 CES-D Scale (島他, 1985) の20項目(調査1と同様)。

アイデンティティ Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版(三好他, 2003) の第V段階7項目(調査1と同様)。

親への信頼 Parent-Peer Attachment Inventory (Armsden & Greenberg, 1987) の Trust and Communication 下位尺度28項目を訳して使用した。情報管理方略で選んだ親について、どう感じているかを“いつもあてはまる(4点)”から“全くあてはまらない(1点)”の4件法で回答を求めた。先行研究(Yau et al., 2009; Tasopoulos-Chan

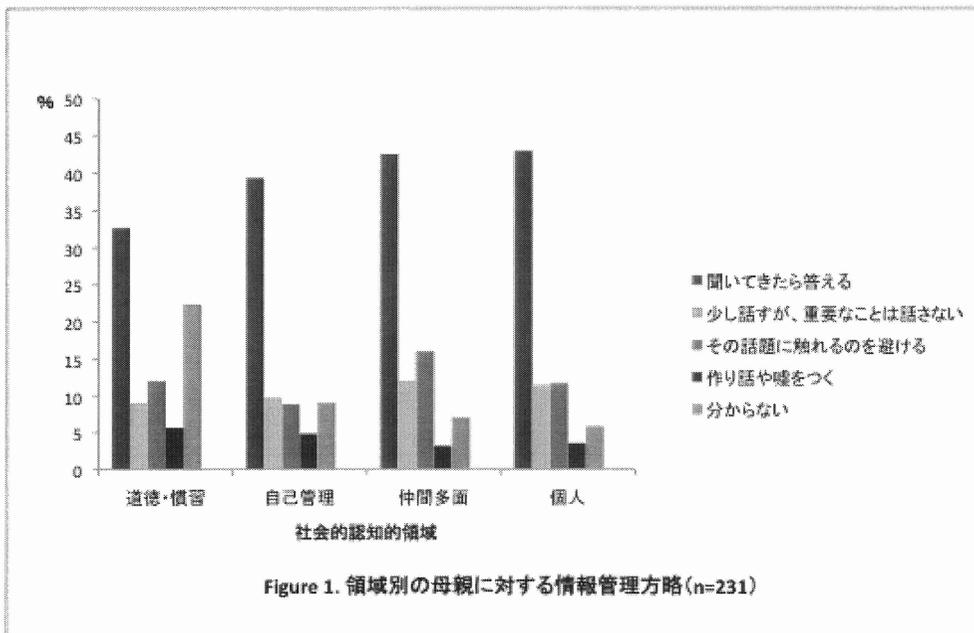
et al., 2009) で検討された Trust 下位尺度10項目を合計し、親への信頼得点とした ($\alpha = .88$)。

結果と考察

情報管理方略と抑うつは、調査協力者1と2より、“不明”が多い2名を除き、231名(男子129名、女子102名、平均年齢18.82歳、 $SD=1.00$)を分析した。

項目ごとにみた母親に対する情報管理方略 まず項目ごとに情報管理方略の選択において性差の有無を確認した。度数が0あるいは期待度数が5未満のセルが全体の20%以上の場合は、その方略を除いて検定を行った。その結果3項目で、情報管理方略における性別による偏りが有意であった。“性描写のある映画や漫画を観ること”について、“回避”は男子に多く、“不明”は女子に多かった ($\chi^2(5) = 21.47, p < .01$)。“誰を好きになったり、夢中になったりするか”について、“嘘”は男子に多かった ($\chi^2(5) = 15.92, p < .01$)。“今日学校で起きたことについて”は、“答える”は男子に多く、“全て話す”は女子に多かった ($\chi^2(2) = 6.69, p < .05$)。

調査1で社会的認知的領域に分類された36の青



年の活動項目に対して,各方略を選択したら“1”,非選択なら“0”とし,領域ごとに合計し領域の項目数で除し,領域における方略の選択率を算出した。

母親に対する情報管理方略の選択率 情報管理方略の選択率は3項目しか性差が無かったため,全員の結果を示した (Figure 1)。方略の選択率を用いてFriedman検定を行ったところ, 道德・慣習 ($\chi^2(5) = 178.9, p < .001$), 自己管理 ($\chi^2(5) = 336.9, p < .001$), 仲間多面 ($\chi^2(5) = 323.6, p < .001$), 個人 ($\chi^2(5) = 332.5, p < .001$) の全ての領域で情報管理方略の選択率に偏りがあった。多重比較の結果,個人領域では選択率の高い方から,“答える”,“全て話す”“回避≒省略”,“不明≒嘘”となった。仲間多面と道德・慣習領域で,他の領域よりも“答える”が多く,“嘘”が少なかった。自己管理領域は高い順に“答える”,“全て話す”,“省略≒回避≒不明”,“嘘”となった。以上より,全ての領域で最も選択された方略は“聞いてきたら答える”であり,最も選択率の低い方略は“作り話や嘘をつく”であることが明らかになった。

社会的認知的領域による情報管理方略の違い

社会的認知的領域によって各情報管理方略の選択率の差を比較するため,フリードマン検定を行い,有意であった方略に対し,ウィルコクソンの符号付順位検定により多重比較を行った。男子の結果をTable 2に,女子の結果をTable 3に示した。

“全て話す”の選択率は,男女とも仲間多面領域よりも自己管理領域で高かった。“答える”は,男子は個人領域よりも道德・慣習領域で低く,女子は他の全ての領域よりも道德・慣習領域で低かった。男女とも“省略”は領域による差はなかった。“回避”は,男子では他の領域よりも仲間多面領域で高く,女子では自己管理領域よりも仲間多面領域で高かった。“嘘”の選択率は男子では領域に差はなく,女子は仲間多面領域と個人領域よりも道德・慣習領域で高かった。“不明”の選択率は,男女とも他の領域よりも道德・慣習領域で多かった。

アイデンティティと情報管理方略との関連 調査協力者1のデータについて,各領域における方略の選択率とアイデンティティ得点(男子

Table 2
男子青年の母親に対する情報管理方略の選択率 (%) (n=129)

方略	道德・慣習	自己管理	仲間多面	個人	χ^2	多重比較
全てありのまま話す	17.27	25.81	8.87	21.45	78.61**	自≒個≒道>仲, 自>道
聞いてきたら答える	35.52	40.47	41.43	44.96	22.67**	個>道
少し話す,重要なことは話さない	8.25	10.31	12.15	9.82	n.s.	
その話題に触れるのを避ける	10.99	10.08	17.92	12.15	36.08**	仲>個≒道≒自
作り話や嘘をつく	5.92	5.35	3.88	4.52	n.s.	
分からない	22.06	7.98	6.72	7.11	84.50**	道>自≒個≒仲

Table 3
女子青年の母親に対する情報管理方略の選択率 (%) (n=102)

方略	道德・慣習	自己管理	仲間多面	個人	χ^2	多重比較
全てありのまま話す	19.43	30.98	16.34	28.27	45.78**	自≒個>道≒仲
聞いてきたら答える	28.97	37.94	44.01	40.52	21.64**	仲≒個≒自>道
少し話す,重要なことは話さない	10.07	9.02	11.87	13.40	n.s.	
その話題に触れるのを避ける	13.37	7.35	13.62	11.11	25.86**	仲≒道>自
作り話や嘘をつく	5.44	4.31	2.40	2.45	19.95**	道>仲≒個
分からない	22.73	10.39	7.52	4.25	109.26**	道>自≒仲≒個, 自>個

$M=18.16, SD=4.10$, 女子 $M=17.03, SD=4.37$) との相関係数を求めた。男子はアイデンティティと個人領域における“嘘” ($r=-.23$) との間に有意な負の相関があった。また道徳・慣習領域における“不明”との間にも有意な負の相関 ($r=-.22$) があった。女子はアイデンティティと自己管理領域における“省略”の選択率との間に有意な負の相関 ($r=-.34$) があった (いずれも 5%水準)。

親への信頼と情報管理方略との関連 調査協力者 2 のデータについて、領域における方略の選択率と親への信頼得点 (男子 $M=30.33, SD=5.08$, 女子 $M=30.78, SD=5.28$) との相関係数を求めた (Table 4)。女子の全ての領域と、男子の道徳・慣習領域を除く全ての領域で、“全て話す”の選択率は親への信頼と有意な正の相関があった ($r=.29$ から $r=.55$)。男女とも全ての領域で、“答える”と“省略”の選択率は、親への信頼と関連がなかった。女子のみ“回避”は、自己管理領域 ($r=-.30$) と

仲間多面領域 ($r=-.31$) で親への信頼と有意な負の相関があった。さらに女子は“嘘”の自己管理領域 ($r=-.31$) で、有意な負の相関があった。“不明”の選択率は、男子は仲間多面領域 ($r=-.53$) で、女子は個人領域 ($r=-.26$) において有意な負の相関があった。

抑うつと情報管理方略との関連 調査協力者 1 と 2 のデータについて、領域における方略の選択率と抑うつ得点 (男子 $M=17.16, SD=9.21$, 女子 $M=19.95, SD=10.54$) との相関係数を求めた。男子では、抑うつとの間に有意な相関があったのは、男子の“嘘”の仲間多面領域 ($r=.24$) と個人領域 ($r=.34$)、さらに“答える”の仲間多面領域 ($r=-.21$) であった。女子の“答える”は道徳・慣習領域 ($r=-.23$) と自己管理領域 ($r=-.25$) で、抑うつとの間に有意な負の相関があった。

社会的認知的領域からみた情報管理方略について 大学生の情報管理方略として個人領域と自己

		全てありのまま話す			
		道徳・慣習	自己管理	仲間多面	個人
男子	$n=24$.19	.42*	.46*	.55**
女子	$n=63$.33**	.36**	.29*	.31*
		聞いてきたら答える			
		道徳・慣習	自己管理	仲間多面	個人
男子		-.12	-.17	-.05	-.23
女子		-.02	-.03	-.02	-.09
		少し話すが必要なことは話さない			
		道徳・慣習	自己管理	仲間多面	個人
男子		.12	-.32	.03	-.23
女子		.14	.07	.10	.04
		その話題に触れるのを避ける			
		道徳・慣習	自己管理	仲間多面	個人
男子		-.06	.14	.12	.19
女子		-.19	-.30*	-.31*	-.23
		作り話や嘘をつく			
		道徳・慣習	自己管理	仲間多面	個人
男子		-.13	.37	.39	-.13
女子		-.17	-.31*	-.01	.13
		分からない			
		道徳・慣習	自己管理	仲間多面	個人
男子		.01	-.26	-.53**	-.18
女子		-.13	-.24	-.14	-.26*

* $p < .05$, ** $p < .01$

管理領域に対し“聞いてきたら答える”が多く、“作り話や嘘をつく”が少ないと予測したが、この傾向は全ての領域に当てはまった。領域の多重比較から、“答える”は、道徳・慣習領域より個人領域で多かった。一方“嘘”において、男子は領域による差はなかったが、女子は個人領域より道徳・慣習領域で多かった。道徳・慣習領域の活動に対しては、親の不承認や罰の恐れという理由によって、個人領域よりも“作り話や嘘をつく”ことが多いという予測は女子で支持された。

仲間多面領域は、個人領域よりも、“その話題に触れるのを避ける”が多く、“全てありのまま話す”が少ないと予測した。多重比較の結果、男子では他の全ての領域よりも仲間多面領域で“回避”が多く、“全て話す”が少なかった。女子は仲間・多面領域と道徳・慣習領域が同程度に、自己管理領域よりも“回避”が多く、自己管理領域と個人領域よりも“全て話す”が少なかった。よって、個人領域と比較した予測は支持されなかったが、仲間・多面領域は“その話題に触れるのを避ける”が多く、“全てありのまま話す”が少ないという傾向は認められた。青年は友人や恋人については親に話したがらない (Smetana et al.,2009) ことが示唆される。

情報管理方略とアイデンティティ、親への信頼、抑うつとの関連について 個人領域で“作り話や嘘をつく”事と、抑うつと正の、親への信頼感と負の、アイデンティティと負の相関があると予測した。男子では、親への信頼とは関連はなく、相関係数は低いものの、抑うつと正の ($r = .34$)、アイデンティティとは負の ($r = -.23$) 相関があり、部分的に支持されたと言える。個人の自由であると判断しているにも関わらず、そうした活動について親に嘘をつく男子は、抑うつが高く、アイデンティティの感覚も低いことが示唆された。青年が嘘をつく主な理由は親の不承認か、罰を恐れるためである (Smetana et al.,2009; Yau et al., 2009)。大学生という青年期後期、あるいは emerging adulthood にあたる時期に獲得される自律性が、

親の過剰な干渉や規則による統制によって、阻害されているのかもしれない。

一方、女子は関連の様相が男子とは異なっていた。女子は個人領域ではなく自己管理領域で、“嘘”と親への信頼との間に負の相関 ($r = -.31$) があった。また自己管理領域で“回避”は、親への信頼 ($r = .30$) およびアイデンティティ ($r = -.34$) と負の相関があった。女子の“回避”選択率は、他の領域より自己管理領域で少ないにも関わらず、自己管理領域で非開示方略を取る事は、低い親への信頼、低いアイデンティティの感覚と関連する事が示唆された。自己管理領域は自己の安全や健康、将来のリスクに関わる活動である。調査1の自己管理領域の項目は、先行研究同様に、飲酒、喫煙、学校をさぼることの他に、自由時間の過ごし方、夜遅い外出などが含まれた。自由時間の過ごし方を親が尋ねることは、息子よりも娘に対して多く (Stattin & Kerr,2000)、一般的に親は自己管理領域の活動を青年が行う時、男子よりも女子に対して統制を試みるだろう。自己管理領域の行動を親に開示しない主な理由は、“親は許さないだろう”であった (Smetana et al.,2009; Yau et al.,2009) ことから、自己管理領域の活動を実際に行うこと自体が、低いアイデンティティや低い親へ信頼と関連している可能性も考えられる。

適応の指標との関連が見られた男子における個人領域、女子における自己管理領域は、他の2つの領域と異なり、どちらも“答える”に次いで、“全て話す”の選択率が多かった領域である。また調査1から男子の個人領域と女子の自己管理領域はその活動を“個人の自由である”と判断すること自体には、低いアイデンティティとの関連はないことが確認されている。にもかかわらず非開示方略を取る青年のアイデンティティの感覚が低いことが示唆された。今後は、親に開示出来ない理由も調査する必要があるだろう。

仲間多面領域を“全てありのまま話す”事と親への信頼との間に正の相関があると予測したが、ほぼ全ての領域で正の相関があった。大学生の時

期でも親が子の意見を尊重することが、青年の自発的な開示を促すことが示唆される。

全ての領域で、“聞いてきたら答える”と“少し話すが必要なことは話さない”方略は、抑うつや親への信頼感との関連はないとの予測は、相関の結果から支持された。二つの方略をまとめて部分的開示と論じる場合もあるが (Tasopoulos-Chan et al., 2009)、“聞いてきたら答える”は大学生の主な情報管理方略であるのに対し、“少し話すが必要なことは話さない”はその選択率や他の変数との関連から明確な特徴は見られず、二つの方略は分けて考えるべきであろう。

総合考察

調査1では、日常の様々な活動を日本の大学生がどのような社会的-認知的領域から判断しているかを、個人の自由であると判断する程度から確認した。本研究の項目は、個人領域の本来の定義に沿った形で、先行研究の項目との対応を確認出来たと言える。今後の日本人青年を対象とした社会的認知的領域理論に基づく親-青年関係、青年期の自律性研究への利用が期待できる。大学生を対象に個人領域の項目を確認した事で、初期、中期青年との比較から、個人領域の拡大といった発達の变化を捉える事が出来るだろう。

調査2では、社会的-認知的領域ごとに大学生が母親に対して使用する情報管理方略に違いがあるか、またその違いと青年の抑うつ、アイデンティティ、親への信頼との関連を検討した。主な知見として、“聞いてきたら答える”は、親への信頼ともアイデンティティとも関連がなく、大学生の最も一般的な母親に対する情報管理方略であることを示した。また先行研究同様、親への信頼と全て話す方略との正の関連を支持した。大学生も友人や恋人(仲間多面領域)について、他の領域よりもその話題に触れるのを避ける方略が多く、全てありのまま話すことは少ない事を明らかにした。さらに、男子では個人領域で嘘をつくことは、抑うつの高さ、低いアイデンティティの感覚と関

連すること、女子では自己管理領域で話題を避けることが、低いアイデンティティの感覚や低い親への信頼と関連することを示し、多数の青年が開示する話題について非開示方略をとることと青年の適応との負の関連を示した。

本研究の限界は、見られた関連はいずれも相関係数は低く、因果関係が不明なことである。青年は既に問題行動に関わっているほど嘘をつく (Marshall, et al., 2005) ため、女子の自己管理領域の関連を解釈するには、面接調査による方略使用理由や親の要因の検討も必要である。また、対象者が少なく、父親に対する情報管理方略を検討出来なかった。父親の知識量が青年のリスク行動に及ぼす影響もあり (Crouter et al., 2005)、本研究でみた母親に対する情報管理方略、その適応との関連は、父親では異なる可能性があり、今後の検討課題である。

文献

- Armsden, G.C., & Greenberg, M.T. (1987). The inventory of parent and peer attachment: Individual differences and their relationship to psychological well-being in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, *16*, 427-454.
- Arnett, J.J. (2000). Emerging adulthood: A theory of development from the late teens through the twenties. *American Psychology*, *55*, 469-480.
- Bosma, H.A., & Kunnen, E.S. (2001). Determinants and mechanisms in ego identity development: A review and synthesis. *Developmental Review*, *21*, 39-66.
- Crouter, A.C., Bumpus, M.F., Davis, K.D., & McHale, S.M. (2005). How do parents learn about adolescents' experiences? : Implications for parental knowledge and adolescent risky behavior. *Child Development*, *76*, 869-882.
- Cumsille, P., Darling, N., Flaherty, B. P., & Martinez, M. L. (2006). Chilean adolescents' beliefs about the legitimacy of parental authority: Individual and age-related differences. *International Journal of Behavioral Development*, *30*, 97-106.
- Darling, N., Cumsille, P., Caldwell, L.L., & Dowdy, B. (2006). Predictors of adolescents' disclosure to parents and perceived parental knowledge : Between- and within-person differences. *Journal of Youth and Adolescence*, *35*, 667-678.
- Darling, N., Cumsille, P., & Martinez, M. L. (2007). Adolescents' as active agents in the socialization process: Legitimacy of parental authority and obligation to obey as predictors of obedience. *Journal of Adolescence*, *30*, 297-311.

- Darling, N., Cumsille, P., & Martinez, M. L. (2008). Individual differences in adolescents' beliefs about the legitimacy of parental authority and their own obligation to obey: A longitudinal investigation. *Child Development*, **79**, 1103-1118.
- Darling, N., Cumsille, P., & Pena-Alampay, L. (2005). Rules, legitimacy of parental authority, and obligation to obey in Chile, the Philippines, and the United States. In J. Smetana. (ed.), *Changing boundaries of parental authority during adolescence*. San Francisco: Jossey-Bass. Pp47-60.
- Engels, R.C.M.E., Finkenauer, C., & van Kooten, D.C. (2006). Lying behavior, family functioning and adjustment in early adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **35**, 949-958.
- Frijns, T., Keijsers, L., Branje, S., & Meeus, W. (2010). What parents don't know and how it may affect their children: Qualifying the disclosure-adjustment link. *Journal of Adolescence*, **33**, 261-270.
- Hasebe, Y., Nucci, L., & Nucci, M.S. (2004). Parental Control of personal domain and adolescent symptoms of psychopathology: A cross-national study in the United States and Japan. *Child Development*, **75**, 815-828.
- Jensen, L.A., Arnett, J.J., Feldman, S.S., & Cauffman, E. (2004). The right to do wrong: Lying to parents among adolescents and emerging adults. *Journal of Youth and Adolescence*, **33**, 101-112.
- Kerr, M., & Stattin, H. (2000). What parents know, how they know it, and several forms of adolescent adjustment: further support for a reinterpretation of monitoring. *Developmental Psychology*, **36**, 366-380.
- Kerr, M., Stattin, H., & Trost, K. (1999). To know you is to trust you: parents' trust is rooted in child disclosure of information. *Journal of Adolescence*, **22**, 737-752.
- Marshall, S.K., Tilton-Weaver, L.C., & Bosdet, L. (2005). Information management: Considering adolescents' regulation of parental knowledge. *Journal of Adolescence*, **28**, 633-647.
- 三好昭子・大野 久・内島香絵・若原まどか・大野千里. (2003). Ochse & Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版 (S-ESDS) 作成の試み 立教大学心理学研究, **45**, 65-76.
- (Miyoshi, A., Ono, H., Uchijima, K., Wakahara, M., & Ono, C. (2003). The Development of a Simplified Version of Ochse & Plug's Erikson and Social-Desirability Scale (S-ESDS). *Rikkyo Psychological Research*, **45**, 65-76.)
- 二宮克美・高橋 彩. (2010). 展望: 社会的-認知的領域理論に関する心理学的研究 (1) 愛知学院大学総合政策研究, **13**, 87-100.
- (Ninomiya, K., & Takahashi, A. (2010). Review: The psychological studies on social cognitive domain theory (1). *JPSA*, **13**, 87-100.)
- Perkins, S., & Turiel, E. (2007). To lie or not to lie: To whom and under what circumstances. *Child Development*, **78**, 609-621.
- 島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘. (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について. *精神医学*, **27**, 717-723.
- (Shima, S., Shikano, T., Kitamura, T., & Asai, M. (1985). New self-rating scales for depression. *Seishin Igaku*, **27**, 717-723.)
- Smetana, J.G. (1989). Adolescents' and parents' reasoning about actual family conflict. *Child Development*, **60**, 1052-1067.
- Smetana, J.G. (2000). Middle-class African American adolescents' and parents' conceptions of parental authority and parenting practices: A longitudinal investigation. *Child Development*, **71**, 1672-1686.
- Smetana, J.G. (2002). Culture, autonomy, and personal jurisdiction in adolescent-parent relationships. In H. W. Reese and R. Kail (Eds.), *Advances in Child Development and Behavior*, Vol. 29, New York: Academic Press. pp. 51-87.
- Smetana, J.G. (2006). Social-cognitive domain theory: Consistencies and variations in children's moral and social judgments. In M. Killen & J. Smetana (Eds.), *Handbook of moral development*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates pp.119-153.
- Smetana, J.G. (2008). "It's 10 O'Clock: Do you know where your children are?" Recent advances in understanding parental monitoring and adolescents' information management. *Child Development Perspectives*, **2**, 19-25.
- Smetana, J.G., Campione-Barr, N., & Daddis, C. (2004). Longitudinal development of family decision making: Defining healthy behavioral autonomy for middle-class African American adolescents. *Child Development*, **75**, 1418-1434.
- Smetana, J. & Chuang, S. (2001). Middle-class African American parent's conceptions of parenting in early adolescence. *Journal of Research on Adolescence*, **11**, 177-198.
- Smetana, J. & Gaines, C. (1999). Adolescent-parent conflict in middle-class African American families. *Child Development*, **70**, 1447-1463.
- Smetana, J.G., Metzger, A., Gettman, D.C., & Campione-Barr, N. (2006). Disclosure and secrecy in adolescent-parent relationships. *Child Development*, **77**, 201-217.
- Smetana, J.G., Villalobos, M., Tasopoulos-Chan, M., Gettman, D. C., & Campione-Barr, N. (2009). Early and middle adolescents' disclosure to parents about activities in different domains. *Journal of Adolescence*, **32**, 693-713.
- Stattin, H., & Kerr, M. (2000). Parental monitoring: A Reinterpretation. *Child Development*, **71**, 1072-1085.
- Steinberg, L. (1999). *Adolescence* (5th ed.) Boston: McGraw-Hill College. pp.274-299.
- 首藤敏元 (1992). チュリエル 日本道徳性心理学研究会 (編), 道徳性心理学—道徳教育のための心理学 北大路書房 pp.133-144.

- (Shuto, T. (1992). Turiel. In Japanese Research of Morality Psychology (Ed.), *Morality Psychology :Psychology for moral education*. Kyoto:Kitaoji. pp.133-144.)
- 首藤敏元・二宮克美 (2003). 子どもの道徳的自律の発達 風間書房 pp.1-22.
- (Shuto, T., & Ninomiya, K. (2003). *Development of moral autonomy in Japanese children*. Tokyo: Kazama.)
- 首藤敏元・二宮克美 (2000). 子どもの社会道徳的判断における大人の権威の受容, 拒否と自己決定 平成9年度 - 平成11年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告書
(The development of conceptions of adult authority and personal-entitlement. 1997-1999 Grant-in-Aid for Scientific Research (C) (2) Final Research Report Summary. Research Project Number 09610104.)
- 高橋 彩・二宮克美 (2010). 展望：権威概念に関する心理学的研究 (6) 愛知学院大学総合政策研究, 12, (Takahashi,A., & Ninomiya,K. (2010). Review: Psychological studies on the conception of authority. *JPSA*, 12, 29-42.)
- Tasopoulos-Chan,M., Smetana,J.G., & Yau,J.P. (2009). How much do I tell thee? Strategies for managing information to parents among American adolescents from Chinese, Mexican, and European Backgrounds. *Journal of Family Psychology*, 23, 364-374.
- Turiel,E. (2006). The development of morality. In N. Eisenberg (Ed.), *Handbook of child psychology. 6 th ed. Vol.3. Social, emotional, and personality development*. New York:Wiley. pp.789-857.
- Yau, J. P., Tasopoulos-Chan, M., & Smetana, J. G. (2009). Disclosure to parents about everyday activities among American adolescents from Mexican, Chinese, and European backgrounds. *Child Development*, 80, 1481-1498.

Abstract: Strategies for managing information about activities to parents were examined in 231 university students, based on social-cognitive domain theory. In Study 1, factor analysis of 40 different type of activities yielded four factors: multifaceted peer, moral / conventional, prudential, and personal domain. In Studies 2, information management strategies for activities in different domains were examined, and correlations between these strategies and depressed mood, identity, and trust in parents were examined. Adolescents reported telling their mothers only when she asked more than all other strategies, and they chose to make up a story or lie less than all other strategies. Full disclosure was associated with trust in parent. Making up a story or lying about personal issues was associated with more depressed mood and less identity of male students. For female students, avoiding discussing the prudential issues was associated with less identity and less trust in parent.

keywords: adolescent, social-cognitive domain theory, disclosure, secrecy, lying

